# 鹿屋体育大学生における大学進学動機と大学在学理由の検討
## ―性，学年，専攻課程による比較―

本多芙美子 *，方住月 **，金高宏文 ***，竹下俊一 ****

# A Study on Motives for Entering University and Reasons for Studying at the University of the National Institute of Fitness and Sports Students
## Comparison by gender, academic year, and courses

Fumiko HONDA*, Juwol BANG**, Hirofumi KINTAKA***, Shunichi TAKESHITA****

## Abstract

This study used 21 items for measuring motives for entering university, as well as 21 items for assessing the reasons for entering university. There were 214 survey respondents, majoring in “Integrated Sport Science” and “Budo” at the National Institute of Fitness & Sports in Kanoya (NIFS) whose responses were used for comparisons of gender, academic year and major. The survey administered for this study included 16 items and considered the three factors of “Title and Employment for Entrance (TEE)”, “Extension of Capability for Entrance (ECE)”, “Enjoying Student Life for Entrance (ESE)” of the motives for entering university. It also included 17 items and considered the three factors of “Title and Employment to be in the University (TEU)”, “Extension of Capability to be in the University (ECU)”, “No Purpose to be in the University (NPU)” with regard to reasons for studying at the university. The results of the correlation analysis showed strong positive correlations between TEE and TEU, and between ECE and ECU.

The three-way ANOVA measuring motives for entering university revealed significance of ECE higher third than first grade of male “Budo” students, first than third grade of female “ Budo” students, female than male of first grade “ Budo” students, male than female of third “Budo” students. Furthermore, the three-way ANOVA assessing the reasons for entering the university revealed significance of ECU higher “Integrated students” than “Budo” of first/fourth male student, third female students. Moreover, there were significantly higher female than male of first grade “Budo” students, male than female of third grade “Budo” students.

The findings of this study suggest that the student except a first grade of “Budo" may exhibit important improvement in self-capability, extension of self-talent and area of strength for chosen university.

**Keywords**： a scale of “the Motives for Entrance”, a scale of “the Reason to be in the University”, Department of Physical Education, three-way ANOVA,

## 背景と目的

マーチン・トロー（1976）によれば，高等教育機関への進学率が50％に近づくことは，進学することが一種の義務とみなされると指摘している。文部科学省の学校基本調査によると，我が国における大学等進学率（全卒業者数のうち大学等進学者の占める比率）は平成19年度以降から50％を超えはじめ，平成23年度には53.9％であった。高校生の２人に１人が大学へ進学する時代となっている。また，厚生労働省の『平成23年度大学等卒業予定者の就職内定状況調査』において，大学生の

*鹿屋体育大学キャリア形成支援室特任助教　**鹿屋体育大学外国人客員研究員　***鹿屋体育大学スポーツ武道実践科学系
****鹿屋体育大学スポーツ人文・応用社会科学系

就職内定率は80.5％であった。就職希望者の５人に１人は就職未決定者として，大学を卒業しているといえる。具体的には，平成23年度の高等学校卒業者数が1,061,564人，大学等進学者数571,797人であったことから（文科省，2011），約21万人の就職未決定者が社会へと輩出されたことになる。中央教育審議会（2012）は，このような状況を危機的に踏まえ，「新たな未来を築くための大学教育の質的転換に向けて～生涯学び，主体的に考える力を育成する大学へ～（答申）」のなかで，大学は本来持つ役割を大きく転換させる必要性があることを訴えている。

また，経済産業省（2010）は，社会や大学が求めるキャリア形成と，学生のキャリア形成に対する意識にはギャップがあり，それをどのように解消し、学生のキャリア形成に対する意識を醸成していくかが課題であることを指摘している。つまり，社会（企業等）が求める就職時に必要な「能力」と，大学が考える社会に必要とされる「能力」，そして学生自身が捉える社会が必要としている「能力」には大きな違いが生じており（経済産業省，2010），その差を埋めるためには，社会と学生との仲介役である大学が変化をする必要があるとしている（中央教育審議会，2012）。

そのような中，鹿屋体育大学では文部科学省補助事業（「大学生の就業力育成支援事業」）の採択を受け，平成22年度から現在もなお，学生への就業力支援活動（たとえば，キャリア形成支援室の設置，キャリア形成科目内容の再検討，就職支援に関わる正課外活動の整備など）を推進する取組を行っている。その目的は，学生への多様な職業選択を可能とする視野の拡大と方向づけ，学生自身の社会的・職業的に自立できる能力を養うことにある。取組を開始してから２年が経過したが，就業力支援に関する活動の学生参加率は年々増加し（鹿屋体育大学・キャリア形成支援室平成22-23年度報告書「スポーツ教育と就業教育によるキャリア育成」，2012），大学内における認知度も向上していると考えらえる。本多ら（2011，2012）は，鹿屋体育大学生の職業未決定状態や社会人基礎力を学年や性別の比較によって把握し，取組改善に努めているが，さらに充実した取組を実施するためには，取組に関する評価および学生の特色を把握し，学生へとフィードバックできる体制を築くことが重要である（松井ら，2008）。

本学学生（１学年200人程度）は入学時，約60％が中学・高校保健体育科教員を希望している。しかし実際に卒業後に教員（非正規教員含む）に就く割合は20％程度（平成12-15年実績）で，約40％の学生が在学中に教員から異なる進路へと変更している。すなわち，50名近くの学生が在学中に教員になることを考え直していることになる。学生は大学選択時，何らかの動機を持つが（古市，1993），大学生活によって動機が変容されていくことが予想される（谷田，2007）ことから，本学学生の進学動機と大学生活によって変化した動機について検討することで，本学学生の進路考え直しの傾向が理解できると考えられる。そこで本研究では，学生がなぜ鹿屋体育大学に進学したのか（進学動機），そして大学生活を経て，現在在学している理由（在学理由）の２点について調査・検討した。

## 調査方法

### １．対象者および手続き

本学に在籍する１年次から４年次までの学生を対象とした。

平成23年10月３－４日の講義時，または部活動開始前の時間を利用し，計223名（全学778名中28.7％）にアンケート用紙を配布，記入後その場で回収した。回答に不備のあるものを除き，214名（96％）を有効回答数とした。

### ２．調査内容

#### (1) 対象者属性

性，専攻課程，学年について尋ねた。

#### (2) 大学進学志望動機

大学進学志望動機の測定は，八木ら（2000）が作成した21項目を用いた。指示文は「あなたが大学へ進学をしようと思った理由について，以下の各項目のそれぞれについて，当てはまる数字に○をつけて下さい。（高校時代を思い起こしてご記入ください）」と表記した。回答の方式は，どの程度そう思うかについて，「全く当てはまらない」を１点，「あまり当てはまらない」を２点，「どちらともいえない」を３点，「かなり当てはまる」を４点，「非常によく当てはまる」を５点と得点化した５段階評定を用いた。評価基準は，項目得点が高いほどより重要な大学進学志望動機と捉えていると解釈した。

### (3) 大学在学理由

大学在学理由の測定については，大学進学志望動機と同様の21項目を用いた。質問項目は語尾を現在形へと修正し，指示文は「現在，あなたが大学生活を送っている中で，重視しているものは何ですか」と表記した。回答方式は大学進学志望動機と同じ５段階評定とした。評価基準は，項目得点が高いほどより重要な大学在学理由と捉えていると解釈した。大学在学理由の測定に際し，大学進学志望動機と同様の内容を用いることで，大学生活を経ることによる進学志望動機の変化を検討することとした。

## ３．分析方法

分析方法は以下の手順で行った。本研究のデータの統計処理は IBM SPSS Statistics 15.0を用いた。

①対象者属性を検討するために，単純集計を行った。

②大学進学志望動機と大学在学理由の項目を精査するために，両方の調査項目に対し探索的因子分析の実施，内的整合性の確認のため $\alpha$ 係数の算出を行った。

③大学進学志望動機と大学在学理由の関連性を検討するために，各下位因子間の相関分析を実施した。

④性別，専攻課程，学年の各対象者属性を独立変数，大学進学志望動機および大学在学理由における下位因子を従属変数に設定し，分散分析による比較を行った。

# 結　　果

## １．対象者属性

対象者の属性を検討した結果，性別では男性が162人（75.7%）で女性が52人（24.3%）であった。課程別ではスポーツ総合課程が177人（82.7%）で武道課程が37人（17.3%）であった。学年別では１年生56人（26.2%），２年生66人（30.8%），３年生50人（23.4%），４年生42人（19.6%）であった。

## ２．大学進学志望動機および大学在学理由

### (1) 大学進学志望動機

八木ら（2000）によって抽出された大学進学志望動機を示す４因子21項目に対し，因子分析を行った。全項目を対象に算出した固有値は，第１因子以下，4.94，4.36，2.04，1.20，1.08，1.04，0.86，という値で推移した。スクリー基準（第１因子から順に寄与率の推移を確認し，寄与率が極端に低下する直前までの因子を採用）から因子数を３もしくは４に指定し，主因子法バリマックス回転による因子分析を行った。その結果，３因子の因子構造がもっとも解釈しやすかったことから，３因子解を採用することにした。

複数の因子に0.4以上の負荷量，もしくはどの因子にも負荷量の絶対値が0.4未満の項目があった場合は，それらの項目を削除し繰り返し因子分析を行った。その結果，「漠然と進学だろうと考えていた」「同じような目的を持った友人を得るため」「自分にあった将来の職を探すため」「他にやりたいことが無かった」「特に自分の意志ではなかった」の５項目が削除され，３因子16項目が抽出された（表１）。

第１因子は，「就職後，より高い役職に就くため」「就職後，多くの収入を得るため」「社会に通

用する肩書きが必要だから」「高い社会的地位を得るため」「就職に有利だから」「高校卒では職に就くのが難しいから」の６項目が抽出され，卒業後の社会的地位や肩書，就職に関する動機と解釈できるため，「進学肩書就職」因子と命名した。第２因子は，「自分の才能を伸ばすため」「得意とすることを追求するため」「幅広い教養を身につけるため」「専門的な知識や技術を得るため」「知的好奇心を満たすため」「人生の視野を広げるため」「興味のある分野を深く掘り下げるため」「資格を取るため」の８項目が抽出され，得意分野の追求といった自己の能力を高める動機と解釈できるため，「進学能力伸長」因子と命名した。第３因子は，「自由な時間が欲しかった」「青春を楽しみたかった」の２項目が抽出され，娯楽への追求と解釈できるため，「進学学生満喫志向」因子と命名した。

各因子の内的整合性は，信頼性係数（α係数）によって確認した。その結果，「進学肩書就職」因子はα=0.92，「進学能力伸長」因子はα=0.81，「進学学生満喫志向」因子はα=0.74であった（表１）。

因子分析によって抽出された因子の平均値をそれぞれ算出した結果，「進学肩書就職」因子は3.2（SD=1.04），「進学能力伸長」因子は4.2（SD=0.68），「進学学生満喫志向」因子は2.9（SD=1.11）であった。

**表１．大学進学志望動機の因子分析結果**

| 質問項目 | 進学肩書就職 | 進学能力伸長 | 進学学生満喫志向 |
|---|---|---|---|
| 10. 就職後、より高い役職に就くため | **.875** | .076 | .125 |
| 8. 就職後、多くの収入を得るため | **.843** | .048 | .108 |
| 7. 社会に通用する肩書きが必要だから | **.841** | -.048 | .021 |
| 11. 高い社会的地位を得るため | **.788** | .043 | .167 |
| 6. 就職に有利だから | **.774** | -.101 | -.030 |
| 9. 高校卒では職に就くのが難しいから | **.685** | .115 | .028 |
| 18. 自分の才能を伸ばすため | -.090 | **.689** | .039 |
| 19. 得意とすることを追求するため | -.070 | **.673** | -.017 |
| 15. 幅広い教養を身につけるため | .089 | **.657** | .041 |
| 21. 専門的な知識や技術を得るため | -.005 | **.636** | -.063 |
| 17. 知的好奇心を満たすため | -.018 | **.555** | .276 |
| 14. 人生の視野を広げるため | .146 | **.546** | -.001 |
| 12. 興味のある分野を深く掘り下げるため | -.043 | **.522** | -.090 |
| 20. 資格を取るため | .109 | **.509** | -.004 |
| 1. 自由な時間が欲しかった | .116 | -.079 | **.823** |
| 3. 青春を楽しみたかった | .112 | .057 | **.690** |
| 信頼性 | 0.915 | 0.812 | 0.739 |

### (2) 大学在学理由

大学在学理由を調査する21項目に因子分析を行った。全項目を対象として算出した固有値は，第１因子以下，5.89，4.24，2.02，1.16，1.10，0.88，という値で推移した。スクリー基準から因子数を３もしくは４に指定して，主因子法バリマックス回転による因子分析を行った。３因子の因子構造がもっとも解釈しやすかったことから，３因子解を採用することにした。

大学進学志望動機における調査項目と同様の手順で項目の取捨選択を行った結果，最終的に「青春を楽しむこと」「同じような目的を持った友人を得るため」「自由な時間が欲しい」「自分にあった将来の職を探す」の４項目が削除され，３因子17項目が抽出された（表２）。

第１因子は，「就職後，より高い役職に就く」「社会に通用する肩書きが必要だから」「就職後，多くの収入を得る」「就職に有利だから」「高い社会的地位を得る」「高校卒では職に就くのが難しいから」の６項目が抽出された。大学進学志望動機の第１因子と同様の項目から構成されており，「在学肩書就職」因子と命名した。第２因子は，「得意とすることを追求する」「自分の才能を伸ばす」「専門的な知識や技術を得る」「人生の視野を広げる」「幅広い教養を身につける」「知的好奇心を満たす」「興味のある分野を深く掘り下げる」「資格を取る」の８項目が抽出された。大学進学志望動機の第２因子と同様の項目から構成されており，「在学能力伸長」因子と命名した。第３因子は，「特に自分の意志ではない」「他にやりたいことが無い」「漠然と進学だろうと考えている」の３項目が抽出され，特にやりたいことがない無目的な動機と解釈できるため，「在学無目的」因子と命名した。

各因子の内的整合性は，信頼性係数（α係数）によって確認した。その結果，「在学肩書・就職」

表２．大学在学理由の因子分析結果

| 質問項目 | 在学肩書就職 | 在学能力伸長 | 在学無目的 |
|---|---|---|---|
| 10. 就職後、より高い役職に就く | **.897** | .086 | .054 |
| 7. 社会に通用する肩書きが必要だから | **.888** | .042 | .083 |
| 8. 就職後、多くの収入を得る | **.865** | .114 | .028 |
| 6. 就職に有利だから | **.826** | .100 | .034 |
| 11. 高い社会的地位を得る | **.758** | .107 | .115 |
| 9. 高校卒では職に就くのが難しいから | **.749** | .044 | .189 |
| 19. 得意とすることを追求する | -.022 | **.807** | -.097 |
| 18. 自分の才能を伸ばす | -.058 | **.798** | -.045 |
| 21. 専門的な知識や技術を得る | .028 | **.705** | -.180 |
| 14. 人生の視野を広げる | .256 | **.704** | -.025 |
| 15. 幅広い教養を身につける | .190 | **.703** | -.087 |
| 17. 知的好奇心を満たす | .077 | **.559** | -.028 |
| 12. 興味のある分野を深く掘り下げる | -.009 | **.548** | -.102 |
| 20. 資格を取る | .078 | **.440** | -.026 |
| 5. 特に自分の意思ではない | -.009 | -.157 | **.827** |
| 4. 他にやりたいことが無い | .118 | -.074 | **.719** |
| 2. 漠然と進学だろうと考えている | .209 | -.128 | **.513** |
| 信頼性 | .934 | .854 | .725 |

因子は $\alpha$ =0.93,「在学能力伸長」因子は $\alpha$ =0.85,「在学無目的」因子は $\alpha$ =0.73であった（表２）。

因子分析によって抽出された因子の平均値をそれぞれ算出した結果,「在学肩書就職」因子は3.31（SD=1.05),「在学能力伸長」因子は4.15（SD=0.68),「在学無目的」因子は2.24（SD=0.92）であった。

### (3) 相関分析―大学進学志望動機と大学在学理由における因子の関連性

大学進学志望動機と大学在学理由の関連性を検討するために相関分析を行った。その結果，各第１因子の「進学肩書就職」因子と「在学肩書就職」因子の間に r=0.81（p<0.01），各第２因子の「進学能力伸長」因子と「在学能力伸長」因子の間に r=0.78（p<0.01）の高い正の相関が認められた（表３）。「在学無目的」因子と「進学肩書就職」因子（r=0.27, p<0.01),「進学学生満喫志向」因子（r=0.39, p<0.01）に正の相関が,「進学能力伸長」因子（r=-0.23, p<0.01）に負の相関が認められた。

### (4) 大学進学志望動機と大学在学理由の属性別による比較

性別，専攻課程，学年の３要因を独立変数，大学進学志望動機（３因子），大学在学理由（３因子）の下位因子をそれぞれ従属変数に設定し，３要因の分散分析を行った。その結果,「進学能力伸長」因子と「在学能力伸長」因子に２次の交互作用が認められた（表４）。

表３．大学進学動機と大学在学理由における下位因子間相関

| | | 進学 | | | 在学 | | |
|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | N=214 | 肩書就職 | 能力伸長 | 学生満喫志向 | 肩書就職 | 能力伸長 | 無目的 |
| 進学 | 肩書就職 | ― | 0.05 | 0.19 | 0.81** | 0.03 | 0.27** |
| | 能力伸長 | | ― | 0.03 | 0.16 | 0.78** | -0.23** |
| | 学生満喫志向 | | | ― | 0.1 | -0.1 | 0.39** |
| 在学 | 肩書就職 | | | | ― | 0.17 | 0.20 |
| | 能力伸長 | | | | | ― | -0.20 |
| | 無目的 | | | | | | ― |

p<.01**

表４　３要因（専攻課程×学年×性別）による分散分析結果

| 2次交互作用 | | 変動因 | 平方和 | 自由度 | 平均平方 | F 値 | p |
|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 課程×学年×性別 | 進学 | 肩書就職 | 2.448 | 2 | 1.224 | 1.159 | n.s. |
| | | 能力伸長 | 5.385 | 2 | 2.693 | 6.774 | ** |
| | | 学生満喫志向 | 5.668 | 2 | 2.834 | 2.330 | n.s. |
| 誤差 | 進学 | 肩書就職 | 210.280 | 199 | | | |
| | | 能力伸長 | 79.103 | 199 | | | |
| | | 学生満喫志向 | 242.020 | 199 | | | |
| 課程×学年×性別 | 在学 | 肩書就職 | 2.869 | 2 | 1.435 | 1.325 | n.s. |
| | | 能力伸長 | 5.927 | 2 | 2.964 | 6.923 | ** |
| | | 無目的 | 3.578 | 2 | 1.789 | 2.223 | n.s. |
| 誤差 | 在学 | 肩書就職 | 215.397 | 199 | | | |
| | | 能力伸長 | 85.192 | 199 | | | |
| | | 学無目的 | 160.181 | 199 | | | |

p<.01**

１.「進学能力伸長」因子

「進学能力伸長」因子において２次の交互作用が認められた要因に対し，単純交互作用，単純・単純主効果の検定を行った（表５，６）。その結果，武道課程１年の性別間［女子学生＞男子学生，F(1)=14.316, p<0.01］，武道課程３年の性別間［男子学生＞女子学生，F(1)=5.194, p<0.05］がそれぞれ有意であった。また，武道課程女子学生の１年生と３年生［３年生＞１年生，F(3)=4.816, p<0.01］，武道課程男子学生の１年生と３年生［１年生＞３年生，F(2)=3.051, p<0.05］においても有意であった。

２.「在学能力伸長」因子

「在学能力伸長」因子において有意な２次の交互作用が認められた要因に対し，単純交互作用，単純・単純主効果の検定を行った（表５，６）。その結果，女子学生３年のスポーツ総合課程と武道課程［スポーツ総合＞武道，F(1)=5.353, p<0.05］，武道課程１年の女子学生と男子学生［女子学生＞男子学生，F(1)=8.498, p<0.01］，武道課程３年の男子学生と女子学生［男子学生＞女子学生，F(1)=5.220, p<0.05］，武道課程男子学生の１年生と３年生［１年生＞３年生，F(3)=5.137, p<0.01］が有意であった。

**表５　単純主効果の検定結果**

| 単純交互作用 | 自由度 | F 値 | 有意確率 | | 平均値 | 標準偏差 | N（人） |
|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 進学能力伸長 | | | | | | | |
| 武道課程における学年×性別 | 3 | 7.230 | ** | | | | |
| ３年生武道課程×性別 | 1 | 4.890 | * | 男子 | 4.42 | 0.472 | 6 |
| | | | | 女子 | 3.64 | 0.392 | 8 |
| 在学能力伸長 | | | | | | | |
| 女子学生における学年×課程 | 3 | 2.83 | * | | | | |
| 武道課程における学年×性別 | 3 | 6.03 | ** | | | | |
| 誤差 | 199 | | | | | | |

p<.01**, p<.05*

**表６　単純・単純主効果の検定結果**

| 単純・単純主効果 | | | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | 自由度 | F 値 | 有意確率 | | 平均値 | 標準偏差 | N（人） |
| 進学能力伸長 | | | | | | | |
| 武道課程男子における学年※ | 3 | 4.816 | ** | １年 | 3.19 | 0.968 | 6 |
| | | | | ３年 | 4.42 | 0.472 | 6 |
| 武道課程女子における学年※ | 2 | 3.051 | * | １年 | 4.53 | 0.437 | 5 |
| | | | | ３年 | 3.64 | 0.392 | 8 |
| 武道課程１年生における性別 | 1 | 14.316 | ** | 男子 | 3.19 | 0.968 | 6 |
| | | | | 女子 | 4.53 | 0.437 | 5 |
| 武道課程３年生における性別 | 1 | 5.194 | * | 男子 | 4.42 | 0.472 | 6 |
| | | | | 女子 | 3.64 | 0.392 | 8 |
| 誤差 | 199 | | | | | | |
| | 自由度 | F 値 | 有意確率 | | 平均値 | 標準偏差 | N（人） |
| 在学能力伸長 | | | | | | | |
| 武道課程１年生における性別 | 1 | 8.498 | ** | 男子 | 3.36 | 0.858 | 9 |
| | | | | 女子 | 4.43 | 0.371 | 5 |
| 武道課程３年生における性別 | 1 | 5.220 | * | 男子 | 4.54 | 0.479 | 6 |
| | | | | 女子 | 3.73 | 0.715 | 8 |
| ３年女子学生における課程 | 1 | 5.353 | * | 総合 | 4.52 | 0.398 | 7 |
| | | | | 武道 | 3.73 | 0.715 | 8 |
| 武道課程男子における学年※ | 3 | 5.137 | ** | １年 | 3.36 | 0.858 | 9 |
| | | | | ３年 | 3.13 | 0.177 | 2 |
| 誤差 | 199 | | | | | | |

p<.01**, p<.05*

※多重比較（Bonfferoni）

## 考　　察

本研究では，本学学生を対象に，なぜ鹿屋体育大学に進学したのか（進学動機），大学生活を経て，現在在学している理由（在学理由）の２点について調査し・検討することを目的とした。

まず，性別，専攻課程，学年の各対象者属性を独立変数，大学進学志望動機における下位因子を従属変数に設定し，分散分析による比較を行った結果，「進学肩書就職」因子や「進学学生満喫志向」因子には属性間に差はなく，全体平均として「どちらともいえない（３点）」程度であった。「進学学生満喫志向」因子については，本学は体育専科大学であり，学生の約90％が運動系サークル活動に所属する。したがって，ただ「青春を楽しみたい」だけで入学している学生は少ないと考えられるため，妥当な結果であるといえよう。

「進学肩書就職」因子であるが，大学進学志望動機としての重要度が高くなかったことは興味深い。本学は約60％の学生が入学時に中学・高校保健体育科教員への志望を明示している。ここに，入学時点ですでに志望進路が決まっているものの，就職への有利性や肩書等を大学進学志望動機として重要視していないという矛盾が生じる。一方で，本学での教員採用率は平成22年度から24年度において，卒業時点で教員として採用される学生が20％程度，正規教員に絞れば１～２％程度である。これらの現状を踏まえると，入学時にすでに教員を志望しているとしても，その多くがただ漠然と教員を志望している可能性が示唆されよう。本学は教員養成系の大学ではないことから，教員を志望する学生にとっては充実した支援が受けられるとは言い難い。しかし多くの学生が漠然としてでも教員を志望しているのにもかかわらず，正規教員をごくわずかしか輩出できていない実態を鑑みると，本学における教員採用試験対策等のキャリア形成支援体制を充実させることは喫緊の課題であると言えるだろう。

「進学能力伸長」因子は，全体平均が「ややそう思う（４点）」程度と先の２因子と比較して高得点であった。武道課程に性別と学年による差が認められ，武道課程１年次男子の平均値が３点程度と最も低かった。これらの結果を踏まえ，武道課程１年次男子を除く学生は，自己能力の向上や自己の才能・得意分野の伸長等を重視して大学進学を志望・選択している可能性が示唆された。

次に，性別，専攻課程，学年の各対象者属性を独立変数，大学在学理由における下位因子を従属変数に設定し，分散分析による比較を行った結果，その結果，「在学進学肩書」因子および「在学無目的」因子には属性間による差は認められず，全体平均として「在学肩書就職」因子は「どちらともいえない（３点）」程度，「在学無目的」因子は「あまり当てはまらない（２点）」程度であった。他にやりたいことがないといった「在学無目的」因子が比較的低い得点であったことは，本学の約９割が運動部活動系サークルに所属している現状を踏まえ，妥当な結果であるだろう。「在学肩書就職」因子が大学在学理由としてあまり重要視されていないことについて，大学進学志望動機時の考察と同様，キャリア形成支援を進めていく上で検討する必要がある。特に，学年間による差がみられないことに注目すべきであろう。調査を行った10月は，３年生にとって就職活動解禁時期２か月前であるにもかかわらず，学年間による差は見られてなかった。就職活動の準備と就職への有利性や肩書の重要性といった大学在学理由は関連していない可能性がある。言いかえれば，学生は大学に対し，就職への有利性や肩書等を求めていない，期待していないのかもしれない。このことについてはキャリア形成支援を促進していく上で重要な点であると考えられるが，本調査からは深く言及できないため，今後より具体的に大学在学理由と就職活動との関係を検討していく必要があるだろう。

「在学能力伸長」因子は「ややそう思う（４点）」程度であり，１年次と４年次男子学生，３年次女子学生における課程別では，全体的に武道課程が

３点台と低かった。また，武道課程１年次では男子学生が女子学生よりも，一方で武道課程３年次では女子学生が男子学生よりも「在学能力伸長」因子得点が３点程度と低かった。さらに，武道課程男子を学年で比較した結果は１年次が３点台と低かった。自己能力の向上や自己の才能・得意分野の伸長等は，本学への在学理由として比較的重要視されているが，武道課程についてはばらつきが生じている。この結果から，以下の可能性が考えられる。第１に武道課程において，なんらかの自己能力の向上を左右する要因が発生している可能性，第２はサンプル数である。今後，課程別の詳細な調査を行うことで，本学学生の特徴を把握することに努めたい。

最後に本研究の限界を述べる。本研究は，鹿屋体育大学の学生を対象とした調査であったが，対象者は全学生のおよそ３割であった。今後は全学的に調査を行い，本学学生における特徴を明確に把握することが，充実したキャリア形成支援を行う上で重要な課題といえるだろう。

## 結　　論

本研究によって得られた知見を以下にまとめる。

①大学進学動機を示す調査項目から，「進学肩書就職」，「進学能力伸長」，「進学学生満喫志向」の３因子16項目が抽出された。

②大学在学理由を示す調査項目から，「在学肩書就職」「在学能力伸長」，「在学無目的」の３因子17項目が抽出された。

③相関分析の結果，大学進学動機における「進学肩書就職」因子と，大学在学理由における「在学肩書就職」因子および「在学無目的」因子に正相関が認められた。大学進学動機における「進学能力伸長」因子と，大学在学理由における「在学能力伸長」因子に正相関が，「在学無目的」因子に負相関が認められた。大学進学動機の「進学学生満喫志向」因子と，大学在学理由における「在学無目的」因子に正相関が認められた。

④３要因の分散分析の結果，大学進学志望動機の「進学能力伸長」因子では，武道課程男子学生において３年次が１年次よりも，武道課程女子学生において１年次が３年次よりも得点が有意に高かった。また，武道課程１年次において女子が男子よりも，武道課程３年次において男子が女子よりも得点が有意に高かった。大学在学理由の「在学能力伸長」因子では，１年次男子，３年次女子，４年次男子，武道課程男子学生においてスポーツ総合課程が武道課程よりも有意に得点が高かった。また，武道課程１年次において女子が男子より，武道課程３年次において男子が女子よりも有意に得点が高かった。

## 参考文献

中央教育審議会（2012）新たな未来を築くための大学教育の質的転換に向けて～生涯学び，主体的に考える力を育成する大学へ～（答申）．p.1.

古市裕一（1993）大学生の大学進学動機と価値意識．進路指導研究14：pp.1-7.

長谷部比呂美（2008）進学志望動機に関する検討―保育・幼児教育専攻学生を中心として―．淑徳短期大学研究紀要47：pp.135-149.

マーティン・トロー（1976）高学歴社会の大学：エリートからマスへ（天野郁夫・北村和之訳）．東京大学出版会：pp.63-64.

経済産業省（2010）社会人基礎力育成の手引き―日本の将来を託す若者を育てるために―．朝日新聞出版：p.5.

文部科学省：学校基本調査−平成23年度（確定値）結果の概要−（http://www.mext.go.jp/component/b_menu/other/__icsFiles/afieldfile/2012/02/06/1315583_3.pdf 平成25年1月15日現在）

上野耕平・中込四朗（1998）運動部活動への参加による生徒のライフスキル獲得に関する研究．体育学研究43：pp.33-42.

本多芙美子・范翔・金高宏文・竹下俊一（2011）鹿屋体育大学生の職業未決定状態に関する一考

察．鹿屋体育大学学術研究紀要43：pp.1-5.
本多芙美子・金高宏文・竹下俊一（2012）鹿屋体育大学生の社会人基礎力に関する研究－性，学年，専攻課程による比較－．鹿屋体育大学学術研究紀要44：pp.1-6.
松井賢二（2008）キャリア形成支援推進のための課題．日本キャリア教育学会編，キャリア教育概説．東洋館出版社：東京，pp.212-213.
竹原卓真（2010）SPSS のすすめ２　３要因の分析をすべてカバー．北大路書房：京都，p.25.
八木晶子・齋藤貴浩・牟田博光（2000）高校生の大学進学志望動機と進学情報の有用度との関連に関する分析．進路指導研究20(1)：pp.1-8.
谷田親彦（2007）大学生が希望する職業の価値観に関する分析―大学入学初期における教職志望大学生の期待価値―．弘前大学教育学部紀要98：pp.59-65.